アイランダー2023

4年ぶりに飲食の提供を再開

個性豊かな出展者たちが島の魅力をPR。写真は右上から時計回りに山形県飛島、新潟県佐渡島、長崎県小値賀島のヒラマサ漬け丼（島グルメコーナー）、鹿児島県獅子島、愛媛県岩城島、東京都神津島

1

2

3

全国の島々が一堂に会するイベント「アイランダー」（主催：国土交通省・日本離島センター）。三一回目を迎えた今回は、四年ぶりに入場制限などを設けない形で開催した。昨年より広い池袋サンシャインシティ「展示ホールD」を会場に、初参加となる香川県男木島など、七〇の離島団体、一五〇以上の島々が出展。二〇二三年一一月一八日～一九日の二日間で約九千人の来場者を集めた。

今回の特徴は「飲食の再開」である。コロナ禍以降、実施していなかった試飲・試食を解禁。さくゆり焼酎（東京都利島）やいりこ（香川県伊吹島）をはじめ各ブースでは、テイスティングをとり入れた特産品の紹介・販売が行なわれた。また、寒シマメ漬けの小丼（島根県中ノ島）など島の食材を使った料理を提供する「島グルメコーナー」も復活。島の風土に根差した味を求め、列ができるほどの盛況ぶりをみせた。

1 奄美群島から唯一の出展となった鹿児島県喜界島。2 東京都青ヶ島は、保育士や看護師などの求人案内に力を入れていた。3 島内の観光施設や名所を案内する島根県西ノ島。4 兵庫県家島諸島のブースでは特産品の海苔の佃煮の販売とともに島の魅力をPRした。5 久しぶりの出展となった石川県舳倉島では、島産の塩やフグなどの海産物を販売。6 漁業の島・香川県伊吹島の特産品「いりこ」。出汁として用いるほか、そのまま食べても美味。7 日本遺産「石の島」に認定されている香川県塩飽諸島。お気に入りの石を見つけて喜ぶ来場者も多かった。8 北海道利尻町のブースでは、日本酒・焼酎・梅酒と利尻昆布の佃煮の試飲・試食を実施。9 島の産品を使った加工品に加え、オリジナルのストラップなどを販売した鹿児島県トカラ列島。

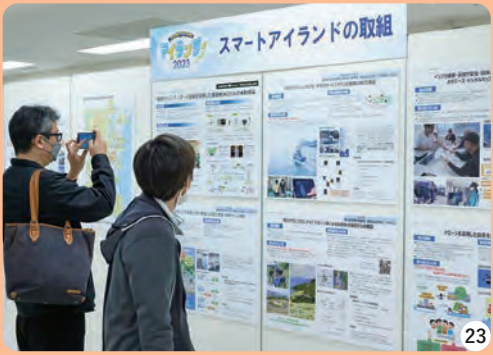
10北海道焼尻島で飼育されている羊の毛を使ったクラフト体験。11愛知県佐久島は海岸漂着ゴミや貝殻をアップサイクルしたマグネットを販売。12東京都三宅島のVR体験は今年も好評。雄山中腹の七島展望台の絶景を仮想体験。13熊本県御所浦島のブースでは、貝化石のレプリカづくりが行なわれた。14大分県屋形島の特産「ヒオウギガイ」を使ったアート作品の展示。15ご当地バーガーやゆるキャラのぬり絵ワークショップを実施した三重県鳥羽諸島。16沖縄県南大東島民謡のステージ。島の情景を軽快な音楽とともに歌い上げた。17大分県姫島で実施した、特産品をオンラインで紹介する「ライブコマース」の模様。18オンラインで現地と会場とを結び、島のPRをする沖縄県北大東島。19東京都新島村のトーク企画。何を話すかは来場者が振るサイコロ次第。

アイランダー
テージ
16

アイランダー2023
【小間番号 10】
東京都 新島・式根島
式根島のなんでも
のコーナー
アイランダーステー
ISLANDER 7
19

PEANUTS
17

18



23

20

24

21

22

20会場の入り口に設置した資料コーナー。21エコモ財団のブースでは、モビリティスクーターの実物を展示し島での活用事例を紹介。22コロナ禍以前にせまる9,000人が来場し、賑わいをみせた。23国土交通省のスマートアイランド推進実証調査の取り組みをパネルで紹介。24サンシャイン水族館にて島にまつわる生物の解説パネルを期間限定で展示(提供：サンシャイン水族館)。25「島グルメコーナー」。ご飯ものの購入者向けに五島列島のあご出汁をセルフサービスで。26会場では、五島の鯛出汁と屋久島の鯖スモークがコラボしたアイランダーならではのカレーも販売。27伊豆大島のカツオソースカツ、八丈島のムロアジメンチカツ、種子島の安納芋フライの揚げ物3種は特に人気が高かった。28「島グルメコーナー」は離島キッチンを展開する離島百貨店が運営。

※HPより各ステージプログラムのアーカイブをご覧いただけます。

昨年に続き、今回も来場が叶わない方に向け、ステージの模様などをオンラインで配信した。伝統芸能などを披露するこれまでのステージプログラムに加え、場内に「オンラインステージ」を設け、会場と島を中継で結び、その模様を配信する試みも行なった。ステージを見た方がブースへ足を運ぶ、会場出展がない団体も来場者と交流できるなど、リアルとオンラインの相乗効果が生まれていた。

アンケートによると、来場者の約八割がアイランダーに来て、島へ行ってみたくなったと答え、四割が島を身近に感じたと回答している。離島振興において、常日頃から移住定住や関係人口の創出・拡大が叫ばれているが、まず島を知り、関心を持ってもらうことが第一歩である。アイランダーがその役目を果たし、島と来場者の交流が盛り上がるよう、次回の開催に向けて尽力していく。

（文・石川／写真・上村昂平）